

一九八三年、今から二十七年前の春、私は地球の裏側ブラジル・サンパウロに居た。日本から時差十二時間。飛行機で二十九時間。ブラジルは秋だった。空気は生暖かく、様々な肌の色とさまざまな体型の人々が歩いていて。インフレが激しく、誰も自国の通貨「クルゼーロ」を信じていない。それでも皆、陽気で明るかった。

日本人移民七十五周年、八代亜紀ブラジル公演に同行してのドキュメンタリーの取材だった。七十五年前、笠戸丸で日本人が初めて上陸したサントスも訪れた。何か胸に迫るものを感じた。

日本人移民者と会い話を聞いた。皆顔は日に焼けて、手に皺が目立ち、日本に居る同じ年齢の人より、老けて見えた。何も聞かなくてもその苦労は、まだ若かった私にも充分伝わった。「棄民」と自らを言い、「勝ち組・負け組」で日本人同士が激しく争った人たち。ただただ、働いて働いて、日本へ還ることだけを夢見た人たち。

サンパウロ公演の翌日、八代さんは郊外の日本人老人ホームを慰問した。そこには、身寄りを失い、日本へ還ることをあきらめブラジルの赤い土・テラロッサになることを決めた、移民一世の人々が老人たちが居た。

懐かしいを歌をいっぱい歌って、八代さんが「何か聞きたいことない？」と言った。

一人の老婆が口を開いた「日本はかしましゅうございますか」

私には初めて聞く美しい日本語だった。

八代さんは「ええ、とつても榮えていて、かしましいですよ」笑顔で答えた。

老婆はじつと遠い日本を思い出すように、空を見つめていた。

遠ければ遠いほど、還れないと知れば知るほど、その想いは純になる。

夢を抱いて離れた遠い故郷日本を思い出していた。夢は破れてしまったが、子供の頃覚えて美しい日本の言葉は忘れていなかった。

取材を終えた私に、先ほどの老婆が近づいてきた。「貴方はまだお若い、どうぞ故郷日本へ帰られて、華々しく活躍くださいますことを祈念しております」

私の手を、褐色の皺に刻まれた両手が包んだ。「はい、ありがとうございます。お元気でいて下さい。またお逢いできますことを」それだけ言うのが精一杯だった。

移民百周年記念ドラマ「ハルとナツ」が放送されたのはそれから二十四年後のことだった。三代にわたるブラジ

ル移民の壮絶なドラマで、平和と豊かな日本に衝撃を与えた。私は若いときNHKのドキュメンタリー「乗船名簿AR29」をやはり鮮烈な思いで見ている。一九六八年放送、ブラジル移民を初めて取材し、取り上げた秀作だった。言いようの無い悲しさを現実を突きつけられた。

十五年後私は、そのブラジルに行くことができたのに、どんな日本語を使って何を伝えることが出来たのだろうか。

昨年、還暦を迎え、三十七年間のマスコミ人生を終えた。あの時の褐色の手を思い出す。あの美しい日本語を思い出す。私は、あの時二度とブラジルには来ることは無いと思っていたのに「お逢い出来ますことを」という言葉を使ってしまった。彼女は私の言葉など当然忘れて、テラロッサに眠っているだろう。

私は、人に誇れるような華々しい活躍も出来なかった。私が乗ったVARIG成田・サンパウロ便。インターネットで調べてみた。廃止になっていた。JALのサンパウロ便も廃止になるという。

日本は本当の意味で「かしましゅう、豊かな国」になれたのだろうか。人々が、明るく楽しくにぎやかな日々を送れる国になったのだろうか。

もし、私が再びブラジルに行くことが出来たとして、彼女のお墓の前で「約束通り逢いに来ることが出来ました」とは言えどもこの日本の現在いまという世の中のことを語れない。

ブラジルから労働移民として大量に逆にやってきて、簡単に棄てられている。

「長生きしても良いですか」、誰もしかと答えられない。

百歳以上の人たちが消えてしまっている国。

「一所懸命頑張ればいいことがある」、誰もはずきりと確信ができない。

毎年三万人以上の人が自殺している。

若い人たちの夢が実現出来ない。希望する仕事が無い国。

あの褐色の手の、老婆の純な日本への心だけは、美しい言葉はいつまでも大切にしたいのです。

日本を想っている人たちが地球の裏側にまだ居るのです。

今もあの手のぬくもりが残るのです。

美しい「かしましゅうございますか」あの言葉は響くのです。